[サリュ]

フランス語で〈救い〉の意。

Salut

人が集まる。いのち弾ける。

シアトリカル

應典院

平成9年、スタート。

発刊のごあいさつ

文化のお寺應典院の再建は、なにわの名刹大蓮寺が創建440周年記念事業として着手するものです。大蓮寺は、多くの文人や教育家、また芸能家とも縁の深い、文教の寺院。應典院はその伝統を踏まえ、地域に開かれた、まったく新しい都市型寺院として平成9年に竣工します。

その構想は、劇場型の本堂を有し、あらゆる世代を対象としたさまざまな研修やイベントを開催、新しいこころのエネルギーを放つ、文化創造の拠点づくりといえます。もちろん劇場機能も装備し、演劇やアートなどの自主公演なども計画、まさに都市の異界として、多くの注目を集めることでしょう。

そして、すべての根本に流れる大乗仏教のみ教え――大慈悲―救い、を、いまという時代に伝えるため、應典院は永劫に一心に精進を重ねる所存です。

本誌は、應典院の実現に向け、すでにスタートしている多くの教化・教育事業、またそれに加え同寺のプロデューサーとして活躍する秋田光彦住職の活動ぶりをお伝えするものです。当面、夏と冬の年2回の刊行を予定しておりますので、どうか末永いご愛読をお願い申し上げます。

應典院再建委員会代表　秋田　光茂

文化のお寺〈應典院〉のニューズレター

4

1996●WINTER●VOL.4

発行■應典院再建委員会
編集■サリュ編集部

應典院　〒543 大阪市天王寺区下寺町1－1－30　TEL(06)771-7641　FAX(06)771-5943

應典院再建募財のご協力ありがとうございます

50音順・敬称略／ご家族は併記（平成7年12月18日現在）

平成七年夏より開始された宝珠銘記、聖柱銘記の勧募には、これまでに延べ四百十二名の方にご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。以下にご寄進いただきました方のご芳名を記します。

〈宝珠銘記〉

植村　保
扇谷謙太郎
扇谷美喜子
扇谷　順介
王子みや子
井上　康子
大里洋吉子
大島　成介
梶原まちよ
梶原　豊子
梶原有美子
梶原安紀子
梶原　誠功
梶原景太郎
梶原　ヨネ
加藤原玄哲
木下こはる
木下　雅夫
栗畑　静枝
栗山　欽充
小澤　磯次
高本　正一
斎藤　里子
斎藤　敏子
斎藤美津子
澤井義陽子
志野　義治
清水　君子
須澤　洋子
関本　桂三
辻阪万　邦子
辻阪　里子
堂馬　博保
中川　健三
中村　丈一
巽　利夫
西川　武平
西村以久子
新田　宗七
橋本　延男
橋本　勲
橋本小八郎
福井　實雄
藤川　珪子
藤塚　獻重
前田　吉隆
槇本美久仁
松下志げ子
松下都江
松原　美祢
森川　甚作
山田　太郎
山田　加代
有田　三郎
有田　直子
綾田慎一郎
綾田　文子
綾田　孟郎
青山　弘嗣
秋田　桜子
秋田　桃江
秋田　光軌
秋田みどり
秋田　豊子
池嶋　俊樹
生野　弘志
生野美千代
生野　栄子
生野　弘子
石渡　隆夫

〈聖柱銘記〉

上田　孔士
上田　紀和
上田　政克
上田　澄子
上田　博造
上田　昌代
上田　頴子
上田　一雄
植田　文夫
植田　武志
植村　敏代
植村　善則
植村　るみ仁
宇都宮チサコ
宇都宮周一
梅本　辰蔵
扇谷　元長
扇谷　英典
大久保綾子
大久保美智子
大島　成介
大島　昭子
大島　誠
岡　幹健
岡　節子
岡橋　保清
岡橋　弘輝
岡橋　保子
岡橋　美佳
岡橋　和生
岡部　治
岡部　信道
奥山　繁男
奥山　ヤヨ
小野　悦嗣
小野　玉子
加藤　満子
加藤友啓
加藤　元嗣
金子　信子
金子　末廣
神谷三郎
川合宇　堅司
川勝　清子
川勝　堅子
河佐　浩一
河内　幸子
河内　一雄
河村きよ子
岸本　楢一
岸本　郁代
木下　敬子
木下　高行
木村　四郎均
木村　照正
葛本　昌也
久保　君枝
栗畑　大善
栗山ノブ子
栗山　卓也
栗山　幸平
栗山　佳美
栗山　正一
高本喜美子
小池　栄
小澤　正一
大西　信雅
大橋　幹健
井出　大八
井出　清子
伊藤　定男
伊藤　裕子
伊藤扶美子
伊藤　隆将
伊藤　雅代
井上　敬梓
井上　和子
井上　紘一
井上　道一
井上健次郎
井上あや子
岩井　一郎
岩本テル子
植田　紀和
植田　文夫
植田　孔士
稲葉　治清
稲葉　誠一
稲葉　房子
稲葉　正睦
稲葉　義浩
奥原多満恵
伊藤　雅代
伊藤　隆将
伊藤　裕子
伊藤扶美子
伊藤　定男
井出　大八
井出　清子
板倉　義信
石渡　敏一

〈その他篤志〉

秋田　茂
秋田　光彦
秋田　光軌
秋田　光一
秋元　貴成
秋田　順雅
秋田　光道
秋田　光彦
秋田　茂
渡辺　一夫
渡辺　公嗣
渡辺　綾子
渡辺　弘
多田　信子
渡瀬　晴人
米野　肇
吉村　正
吉見谷五平
吉原　雅代
吉原　卓哉
吉原　徹哉
吉原　郁代
吉原　佳代
吉原　寛彰
吉原　龍憲
吉原　君子
吉田　治
吉崎　武男
吉川　光明
吉岡　秀起
湯浅甲　二郎
山本　正男
山本　幸子
山本　憲一
山本　純子
山本　敬子
増田　融
増田　美代子
増田　富美
増田　島
正木千代子
正木　謙次
槇本　美久仁
山本　隼夫
山本　達大
山本　久美
山本　宣夫
前田　恵
前田　美子
船越　眞道
船越タマ子
福貴　良三
福貴　富栄
福貴　光三
藤村　愛子
藤原　泰子
藤原　薫
藤塚ヒサミ
藤塚　貞子
藤塚　富三郎
藤塚　裕子
奥田　伸子
藤田寿美子
藤沢　弘子
藤井　臣也
福桝照比古
福永　正一郎
深見　俊雄
深見　義男
深見　榮一子
平田八重子
平田　重明
平井　浩雄
樋口　信雄
林　錦洞
花山佐智子
花山　孝
畠中　晴子
長谷　幸夫
橋本　充子
橋本　宗幸
水谷　雅治
水野　美朗
水野　茂
三田村富美子
三田　正男
峯野　穣璋
峯野　秀明
箕口扶美江
箕口　弘
三宅　善信
三崎喜代治
三崎シキヨ
宮崎　喜郎
宮崎ひろ子
三好　光男
村上　敏克
村田　実
村田　育代
村田ヨシエ
村田　敏子
村田士乃武
村田　陽子
村田　昌子
村田　治子
桃田　政子
桃田　昭一
桃田　芳次郎
桃田　芳薫
森井　正博
森井　治子
森川　保昌
森川　恭子
森川　朝博
森川　和美
森川　靖二
森川太喜夫
森田　雅子
森田　愛子
森田　容司
森田　千秋
森本　庄厳
安田　隆
安田　昌男
安田　庸築
山内　稀
山口　啓子
山路　修平
山崎　敬子
山崎　幸子
山崎　佳美
山崎　正一
山崎　栄
山下　一夫
山下　浩
山下　信雄
山下　雅子
山下　勝美
山下　正子
山下　桂子
山下　知美
山下　晴美
山下　守
山田　雅恵
山田　和司
山田　和子
山田　喬弘
山田　幸栄
山田　幸子
山田　恵子
山田　孟郎
山田　文子
山田　慎一郎
山田　直子
山田　三郎
山田　綾子
山田　太郎
山田　加代
山田　桂子
山田　美代子
山田　弘志
山田　栄子
山田　勝
山田　正
山田　和弘
山田東洋司
山田　健伸
山田　寛長
山本　晴美
山本　雅由
山本　恵司
山本　和子
山本　喬弘
山本　幸栄
山本　幸子
山本　市男
山本　西洋子
山本　仁井谷
山本　仁井谷
山本　満子
山本　仁井谷
山本　広子
山本　恒子
山本　永原
山本　恒雄
山本　淑子
山本　哲也
山本　中村由美子
山本　中村丈男
山本　中村治子
山本　中村政英子
山本　中林久美子
山本　中林英信
山本　中林信二
山本　中田武仁
山本　中川孝雄
山本　堂馬美智子
山本　堂馬昭子
山本　堂馬将史
山本　堂馬佳代
山本　堂馬浩司
山本　堂馬敬子
山本　堂岡肇
山本　戸田幹子
山本　東村昇
山本　東村武二
山本　鶴保睦緒
吉田　治
吉田　信道
吉田　龍憲
吉田　君子
吉田　寛彰
吉田　佳代
吉田　郁代
吉田　徹哉
吉田　卓哉
吉田　雅代
吉田　五平
吉見谷　正
吉村　米野
吉村　晴人
吉村　肇
吉村　正
吉見谷五平
吉原　雅代
吉原　卓哉
吉原　徹哉
吉原　郁代
吉原　佳代
吉原　寛彰
吉原　龍憲
吉原　君子
吉田　治
吉崎　武男
吉川　光明
吉岡　秀起
湯浅甲　二郎
山本　正男
山本　幸子
山本　憲一
山本　純子
山本　敬子
渡辺　公嗣
渡辺　綾子
渡辺　弘
多田　信子
渡瀬　晴人
米野　肇
吉村　正
吉見谷五平
吉原　雅代
吉原　卓哉
吉原　徹哉
吉原　郁代
吉原　佳代
吉原　寛彰
吉原　龍憲
吉原　君子
吉田　治
吉崎　武男
吉川　光明
吉岡　秀起
湯浅甲　二郎
山本　正男
山本　幸子
山本　憲一
山本　純子
山本　敬子
渡辺　佳知子
渡辺　公嗣
渡辺　綾子
渡辺　弘
多田　信子
渡瀬　晴人
米野　肇
吉村　正
吉見谷五平
吉原　雅代
吉原　卓哉
吉原　徹哉
吉原　郁代
吉原　佳代
吉原　寛彰
吉原　龍憲
吉原　君子
吉田　治
吉崎　武男
吉川　光明
吉岡　秀起
湯浅甲　二郎
山本　正男
山本　幸子
山本　憲一
山本　純子
山本　敬子
秋田　光彦
秋田　光軌
秋田　光一
秋元　貴成
秋田　順雅
秋田　光道
秋田　光彦
秋田　茂
渡辺　一夫
渡辺　公嗣
渡辺　綾子
渡辺　弘
多田　信子
渡瀬　晴人
米野　肇
吉村　正
吉見谷五平
吉原　雅代
吉原　卓哉
吉原　徹哉
吉原　郁代
吉原　佳代
吉原　寛彰
吉原　龍憲
吉原　君子
吉田　治
吉崎　武男
吉川　光明
吉岡　秀起
湯浅甲　二郎
山本　正男
山本　幸子
山本　憲一
山本　純子
山本　敬子
佐藤　一夫
佐藤　浩
増田　錦洞
増田　美代子
増田　融
増田　信
林　錦洞
林　浩
増田　美代子
増田　融
増田　信
松田　キ

〈寺院篤志〉

秋田　茂
秋田　光彦
秋田　光軌
秋田　光一
秋元　貴成
秋田　順雅
秋田　光道
秋田　光彦
秋田　茂
渡辺　一夫
渡辺　公嗣
渡辺　綾子
渡辺　弘
多田　信子
渡瀬　晴人
米野　肇
吉村　正
吉見谷五平
吉原　雅代
吉原　卓哉
吉原　徹哉
吉原　郁代
吉原　佳代
吉原　寛彰
吉原　龍憲
吉原　君子
吉田　治
吉崎　武男
吉川　光明
吉岡　秀起
湯浅甲　二郎
山本　正男
山本　幸子
山本　憲一
山本　純子
山本　敬子
佐藤　一夫
佐藤　浩
増田　錦洞
増田　美代子
増田　融
増田　信
林　錦洞
林　浩
増田　美代子
増田　融
増田　信
松田　キ

きみのたましいは、ここにある。
自分癒しのための学びへ——。

應典院住職　秋田光彦師に聞く。

RUN&RUN

お元気ですか。

近頃、学習体験にハマってしまって、あちらこちらの会場に出没しております。弁天町市民学習センターや大阪ボランティア協会、大阪ＹＭＣＡ等々…学校の先生であったり、福祉協会の職員、ＮＧＯのスタッフなどそこでの出会いはいろいろですが、自己の研鑽に励みながら、「あ、こんな場が應典院でもつくれたらな」と夢想できるチャンスには事欠きません。ありがたいことです。

中でも、九月からスタートした関西ＮＧＯ大学（関西ＮＧＯ協議会・主催）は、今年二月まで毎月一回ずつ、一泊二日の日程で実施されるというロング企画。ロールプレイやゲーム、グループセッションなど取り入れながら進められる、参加型のプログラムも魅力的でしたが、いちばん感激したのは、約五十人ほどの若い参加者たちについてでした。

研修も終わり、夜の九時も過ぎれば、あちこちで酒盛りが始まり、生きがい、ゆたかさ、自己と社会、家族、理想等々：若者の辞書からはとっくに消え去ったと思われたようなテーマが自在に熱っぽく語られます。ぼくの身元がお坊さんと分かると、オウムや信仰について、率直な質問が次々投げかけられたのも、戸惑いながらも、うれしい体験でした。

もう十年も前のことですが、当時の新宗教と若者を取材した経験があります。その時も、事座になって人生論を戦わす若者の姿に驚いたものでしたが、議論の落ちつき先はたいていが「神秘」や「超能力」でした。オウムの若者たちもまた、自分を捨て奇跡に人生を委ねた、出家集団であったのでしょう。

ＮＧＯ研修の若者たち

むろんＮＧＯが万能の救世主であるといっているのではありません。しかし、国家や企業にがんじがらめにされた若者たちが、自分らしい生き方を模索し始めている、そんな印象がここにはありました。

自分発見のための学び。あるいは自分癒しのための学び。應典院の大事なテーマについて、しばらく学習が続きます。

からだ・たましいの教育

さて、十一月二十七日に、應典院のトークコンサートの第二回を実施しました。今回のテーマは、「都市・教育・仏教」。会場の一心寺シアターは百六十名が参加、立ち見が出るほど盛況でした。多々至らぬ点がありましたが、語りベライブやトークセッションなど、ぼくとしては應典院の具体的なイメージを提案したつもり。映像や音楽を駆使したメディア説法は、いずれ定番をもくろむものですが、キャスティングの配置や舞台のつくりようなど、目に見えて理解していただけたのではないでしょうか。

トークの内容については、特集に譲りますが、ゲストの汐見稔幸先生が、「からだと教育」ということについて強調されたことが、ぼくにはいちばん印象的でした。

「いまの若者たちは悩みそのものが身体化されているから、からだの上手なコニケーションやコントロールができないと、癒しはなかなか実現できません。仏教の儀礼、あるいは演劇や音楽が持つ身体性に着目した、新しい教育が考えられないでしょうか」

同時に、心身の二元論は人間を救わない、たましい・霊としかいいようのないものが、教育には必要だと指摘があったことも、ぼくには心強く感じられました。あ、新しい学びの姿を、誰もが求め始めているな、という実感がありました。

強いて勉めるのが勉強であって、これは学びの本質と同義ではありません。福沢諭吉の「学問のススメ」以来、日本人の学習は立身出世の方便となりましたが、近代教育が頭打ちになって、ようやく学習本来の意味をとらえなおす機が到来したように思います。それも、できるだけいろんな人がいろんな場で、ごちゃごちゃやった方がいい。そういう混沌があってこそ、ぼくは次の時代の多様な生き方が提示できるのではないかと思っています。



第２回應典院トークコンサートで　於一心寺シアター　1995.11.27

現代仏教・選択の旅へ

最近、他宗のお坊さんの勉強会に招かれることが多くなりました。先日は「現代に仏教を問う——どこへ行く、寺と僧侶」という、京都の若手僧侶の会が主催する研修会に参加、外野の一人として意見を述べてきました。

少し残念だったのは、パネラー各氏の発言に後退原則でもあるかのように、諦観や自棄が目立ったこと。むろん伝統社会の縛りの中で、いろいろな困難があることは想像に難くないのですが、もはや宗派や教団といったところから活動を想起すること自体がしんどくなってきているように思います。あるいは、伝統宗教とか教化伝道とか言った瞬間生まれる、ある権威的、懐古的な気分を、ぼくたちはひとつひとつ検証していかなくてはならない時代なのでしょうか。

法然にせよ日蓮にせよ祖師方は、絶対を選び取るための苦闘を続けてこられました。不遜ではありますが、同様に、ぼくらも改めて現代というブラックホールの前で、まことにちっぽけな闘いですが、選択の旅を試みてみる時が来ているような気がします。

この旅はたいへんな危険を伴います。一歩踏み込んだ瞬間、伝統が伝統でなくなったり、教化がただの教育にも劣ったり、そういう危うさを充分承知しながら、あらゆる種々雑多なものを呑み込んで、攪乱され、混迷され、なおこうありたいと願う時、初めて教団とか宗派、世襲とか寺檀という世界が、ぼくのこころの根っことして大きなものを寄与してくれると信じています。

世紀末の都市寺院・應典院

最後に應典院の三題咄を。

まず、七月から始まった應典院の勧募事業が、のべ四百十二名二千五百万に達しました。とくに六十体限定の宝珠銘記は約四ヵ月で早々と満了、皆様のご篤志に厚く厚くお礼申し上げます。寄付社会としての日本はまだ未成熟といわれますが、古よりお寺の勧進というのは、寺檀という基盤の上にかくも洗練された制度を築き上げました。大したものです。

また、應典院の建築設計が昨年末に完了、その模型からしてあっと驚く表情で、完成時には巷の話題を集めること必定でしょう。新年には施工業者も決まり、いよいよ一月二十一日起工式、三月五日には地鎮式となります。

最後に、應典院プロジェクトが本格的にスタート。プロジェクトは、應典院のソフトプランのための頭脳集団で、五人のスタッフと数人のアシスタントによって成り立っています。現在、異分野の取材やヒアリングを続けており、竣工一年前の五月には、應典院フォーラムを開いて、この世紀末の都市寺院の全貌が明らかにされる予定です。

TALK&TALK

「中心なき迷宮」を超えて——現代の寺、應典院の息吹

第二回應典院トークコンサート

吉崎　中

トークコンサート後に「平成七年は應典院にとって、縫合でいうと仮縫いの一年」とおっしゃっていました。どのような形に縫い合わされているのか、期待の膨らまないはずはありません。

ところで、應典院というお寺は「お墓のないお寺」になるそうです。大蓮寺の塔頭寺院ですから、大蓮寺さんの広大な墓地に隣接はしますが、應典院はそれを借景にするだけで自らは墓を持たない。お寺といえば、墓という家の縁で人々とつながるイメージが普通でしょうから、これはそれだけで画期的というか「変わった寺」ということになります。

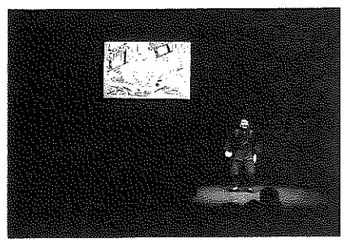
では、應典院は何によって人々とつながるのか、それは「應典院という場」としか言いようがありません。一見、奇異に感じられますが、たとえばこのトークコンサートにしても、それぞれに集った一人ひとりには、それこそ家の縁も無いわけです。もちろん、本寺である大蓮寺の檀家さんもおられたと思いますが、「應典院という場」とでも言うべき新しい縁が広まりつつある、それは十分に実感できました。

考えてみれば、現代人はさまざまな縁を結びあって暮らしています。会社、スポーツや趣味の同好会、それぞれが場による縁といえます。魅力ある場、惹きつけられる場というのはどのような形なのだろうか、そんな思いを巡らせていくうちに、大蓮寺住職秋田光茂師の挨拶に続き、第一部「なにわの語りベライブ」が始まりました。

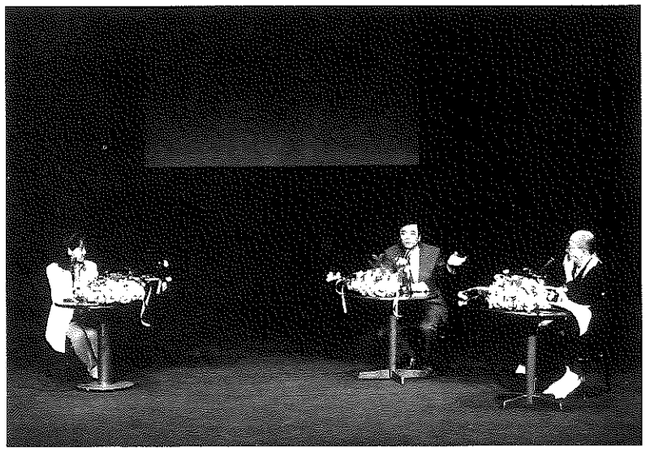
もの悲しい思い出

暗転した舞台、現代の下寺町の情景がスライドで再現されます。石畳の坂道。古刹の森。都市としての大阪から忘れられつつある存在。キタやミナミ、いずれにしても行き来するのは地下街ですし、縦横に走っていた運河も埋められて道路になり、八百八橋の多くは名を残すだけになっていった。坂や橋というのは、まあない方が歩きやすい物ではありますが、こざっぱりなくなってしまうというのも考え物ですね。下寺町にはそういう忘れかけているものが残されている、それが幕開きのメッセージでした。

舞台に岩井ゆき子さんの澄んだ歌声が流れます。その童歌に導かれ、時は江戸の昔に遡り、大蓮寺の縁起を読く形で秋田光彦師の語りが始まりました。それは、今で言えば千日前の大通り、あの辺りから下寺町界隈は一種の異界であり、そこに至る橋の名前が極楽橋、渡りきった彼岸の最初の寺が大蓮寺であった、というものでした。橋のたもとで草鞋を履き替え、装いを正すという習慣もあったとのことです。



「寺町物語」　熱演する渡辺毅さん



「トークセッション」　左から栗本智代さん、汐見稔幸先生、秋田光彦師

語りの合間に挟まれる、作務衣姿の渡辺毅さんが熱演する市井の人々の人情が、岩井さんの童謡が、しんしんと心の深くを掘り起こします。なんとも、もの悲しい。忘れてしまっていた何かを思い起こさせます。それは簡単につかめそうでいて、指の間からするりと抜けていく。思えば、江戸や明治の情緒といっても、誰一人憶えているはずありません。それは、憶えていない事を忘れてしまった悲しさ、もう誰もつかみ直すことなどできないという悲しさなのでしょうか。

そして、太平洋戦争。全てが灰燼に変わり果てた。さて、燃え尽きたのは何だったのか。残り受け継がれた物は何だったのか。現代社会の急成長を説く辺りで終演となりました。

二十分ほどの小さな舞台でしたが、大蓮寺から應典院へと続く一つの流れはいきいきと浮き彫りにされていたように感じました。それは本寺の大蓮寺が高津小学校や天王寺高校の発祥の地という文教の流れ以上に、こころの思い出というか、もっと見えない意思を、應典院は引き継ぐという決意に他ならなかったのではないでしょうか。

ただ単に懐古するだけではいけません。多分、もう誰もつかみ直すことなどできないのでしょうから。そう考えると、語りの最初に秋田師が強調されたこと、橋を渡った最初の寺、つまり異界の中の應典院という位置づけが重要に思われてなりません。

應典院は異界です。しかし、そこに赴くために草鞋を履き替える場所など、既に現代には存在しません。草鞋を履き替えるのはむしろ住職である秋田師であり、私たちを現代社会の暮らしの中に迎え入れる、そういうことなのでしょうか。

光を呼吸する寺

第二部は、一心寺住職の高口恭行師による、建築物としての應典院の解説です。当代一流の建築家でもある師の、ユーモアを交えた解説は非常に判りやすく、現代の異なる場である應典院の容姿はぐんと身近なものに映ってきました。

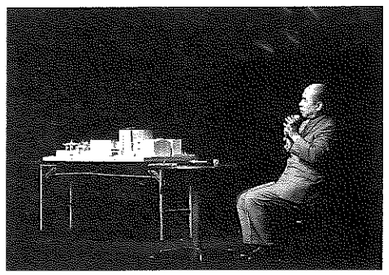
舞台装置を備えた円形の本堂とか、開放的なエントランスなどなど、應典院という建築には数々の特徴があります。これを一言でまとめるとしたら、「光を呼吸する寺」と呼ぶことができないでしょうか。昼間は太陽の輝きが本堂に差し込み、夜は應典院からの光が松屋町筋を照らす。それは呼吸のようにひとつながりにこの場と交感することでしょう。

應典院の建立される下寺町のかかりは、言ってしまえば、現代ではずいぶん猥雑な所です。ビジネス街に隣接し、少し離れるとなにやら派手なホテルもひしめいています。同時に、大蓮寺境内のパドマ幼稚園や高津小学校という進んだ学びの場もあります。それぞれ現代の生活を映しているわけですから、誤解を恐れずに言えば、その両方とも見つめなければ現代の寺としては偏りに陥るわけです。

猥雑な部分にも、人の生きるエネルギーという物は満ちている。もちろん、エネルギーの発揮の仕方を間違えると宜しくなくて、戦争などはその典型とも考えられます。そういったエネルギー、光に象徴しているわけですが、これを異なる場が呼吸することで調和を生み出せないだろうか、そんな思いが、應典院の建築設計には込められている、そう感じました。

本堂の舞台装置というのも、ひとつながりの機能として理解できます。舞台というのが、闇と明かりで形作られることは第一部のなにわの語りベライブでも充分に表現されていました。闇を切り裂く明かりの中に、人の言葉があり、歌があり、舞踏があるわけです。

常には本堂として、阿弥陀仏の来迎を象徴する自然の光が呼び込まれ、そして現代に暮らす者として、調和と希望を願う人間のエネルギーが闇を照らす。猥雑な電飾には自然を吸い込む力がないから、かえって闇ばかりが



應典院の建築設計について説明する高口恭行師


「都市・教育・仏教」 秋田師の語りに熱がこもる

「祝祭」という二つのテーマがあり、それは應典院の中心で互いに結びついているわけです。今回のトークは「学び＝教育」を切り口として、その中心、つまり應典院の核心に迫っていったととらえてよいでしょう。

ご都合で来場されなかった方にトークの内容をお伝えするのが責ではありますが、一時間二十分の間に交わされた言葉、イメージは膨大であり、ブックレットなどによって再現される機会を秋田師にお願いすることでその責を謝し、少々個人的な意見ではありますが、トーク全体を拝聴しての感想を書き連ねさせていただきます。

現代の教育に何か欠けているものがあるのではないか、または、過剰すぎるものがあるのではないか、そういう指摘は今に始まったわけではありません。問題解決に向かう輪郭は、我々のこころの中におぼろげながらも確実にあります。それは秋田師が語られたように、そもそも教育とはどのような年齢の人にも機会が与えられていなければならないという中にも、汐見先生や栗本さんが強調されたように自分自身が何かを見つけるという中にも見出せます。ただ、我々は時に、その唯一の解決方法を求めようと急き過ぎてはいないだろうか。秋田師も汐見先生も栗本さんも「こうすれば教育はたちどころに改善する」などといった発言はなされません。積み上げられるイメージ、言葉、熱い思い、その全てを私たちが真摯に受け止め、私たちが考えて行かざるを得ないのではないでしょうか。

應典院のソフトウェア、それは説法とかセラピーとか市民活動とか演劇＝芸能とか、さまざまな形を取ると思われます。価値観が多様化された現代社会にあって、唯一絶対の物事を伝達する場などうさんくさいだけです。汐見先生も栗本さんも、秋田師とは価値観の異なる部分もあると思います。その上で真摯に想いを語られる、私たちはこのトークコンサートで應典院のソフトウェアに一部接することができたわけですが、そこには何かを発見する満足がありました。その発見こそが、現代の都市生活における「学び」なのかも知れません。こういった多様な姿を見聞きするに連れ、應典院という現代の寺をなんと呼べばよいのか、すり抜けていく言葉をつかみ切れないもどかしさを感じます。しかし、それは過去に失われた言葉ではなく、現代に息づく言葉として必ずつかむことができるでしょう。

中心の描き方

今回のトークコンサートを振り返ってみましょう。第一部は應典院の背景を「芸能」という姿を借りて立体的に伝えるものでした。そこに、こころを受け継いできた異界としての自負＝應典院の意気込みを感じたというのは言い過ぎでしょうか。

第二部は應典院というハードウェアの解説。光を呼吸する寺、即ち、現代を一面だけの上滑りに語るのではなく、聖も俗も見据える決意とでも言えばよいのでしょうか、聖の異界として君臨するのでもなく、俗にへつらうことなく糺し、教える。私たちは崇めるのではなく、ただ、生活者として應典院を訪れることができる、そんな期待が膨らみました。

第三部は、應典院は何を教えるのかという核心の表明であったわけですが、それは今回目立つのかも知れません。

高口師は解説の結びとして、会場である一心寺が松屋町筋を一直線に、應典院とつながっていることに言い及ばれました。現代社会を象徴する言葉に、デジタルというものがあります。それぞれがばらばらに屹立するイメージ。それは鋭く便利なことかも知れませんが、それに偏るだけでは闇を濃くする一方かも知れません。たとえば呼吸であるとか、直線で結ばれた場であるとか、アナログ的な連続ということに含まれるメッセージも大切にしなければならないでしょう。

應典院のソフトウェア

さて、十分間の休憩を挟んで、第三部「ぼくたちの應典院について語ろう」です。

トークセッションという形式、司会の大阪ガス、エネルギー・文化研究所の栗本智代さんに導かれ、東京大学教育学部助教授の汐見稔幸さんと秋田師が「都市・教育・仏教」というテーマに基づいて、その思いを語られました。

ご存知のように應典院には「癒し」「学び」「祝祭」への道のりは感じることができたと思われます。

現代社会はよく「中心のない迷宮」にたとえられます。我欲に煽られた「点」としての個が飛び交い、各々がばらばらに屹立し気づきのない社会。その脱構築というのが急務であるのは共通した認識でしょう。よりどころとなる中心が描かれることが渇望されているわけですが、急いで他人に解答を求め、唯一にすがるだけでは何の変わりもありません。私たち一人ひとりが学び、語り合うことで、徐々に広がりのある中心が描かれていく。そのきっかけの一つとして「異なる場」應典院があるということではないでしょうか。

應典院というのは、ハレ舞台なのかも知れません。これだけ思い切ったことをするわけですから、住職の晴れの舞台であることは間違いないでしょうが、それは私たちにとってのハレ舞台でもあります。例えば、二部と三部の幕間に、ベトナムに関するNGO協力を呼びかけるお知らせがありました。僧籍の方でしたが、基本は市民活動の呼びかけでありました。應典院を巡って多彩な顔ぶれが語り合い、彩っていく。その一つひとつは、現代をいっぱいに「癒し」「学び」「祝祭」する生活者たちんとする顔であったように思われます。一人ひとりのハレ舞台になることで、應典院の息吹、現代の中心の一つが描かれていくのではないでしょうか。

（取材／文　よしざき　かなめ）

連載・宗教乞食のモノローグ（4）　中谷　加代

「葬式ごっこ」

カウンセリングの学習方法の一つに、ワークショップという学習がある。実践的に「私という人間」を学ぶ場で、ほとんどの場合、三泊四日程度の期間、「現実生活から離れ、自分自身の心や他の参加者の心と、深く向き合う」ことを学習する。

もう今から二十年近く昔の話だけれど、あるワークショップに参加していた時のこと。

ロジャーズ派といわれるI先生のグループは、なぜだか宗教関係の人が多かった。神官さん、お坊さん、神父さん、坊守さんに牧師夫人、あとは学校の先生や看護婦さん。

その時も、いつものように「○○さんの×の発言に傷ついた」とか、「私はいつも裏切られてばかり…」とか、職場での葛藤や親への恨みで泣いたり怒ったり、実に生々しい感情が飛び交っている時、ふと耳にした「葬式ごっこは面白かったなあ！」の一言。

ちょうどその頃、私は自分の心の深いところに「死の恐怖」を隠し持っていることに気づいていた。そして、それが私自身の日常生活の中で、時に心の底から浮上して、「私らしくない私」を表現してしまう原因になっているらしいことも知っていた。

私は心の奥底の「死の恐怖」の実態を確かめ、「私らしくない私」を追い払ってしまいたいと望んでいた。そんな私に「葬式ごっこ」という遊びは、何か解決の手掛かりを与えてくれるキーのように思えた。「葬式ごっこやりたい！　しようよ！」と、休み時間に走り廻って、皆を誘って廻った。やっと参加者全員の同意を得て、先生に「葬式ごっこして下さい」と申し出たものの、先生はシブイ顔。「あなたには、まだ早すぎる遊びです」と、その時のワークショップでは「葬式ごっこ」はしてもらえなかった。

そして一年後、前回と同じグループに参加して、また「葬式ごっこしようよ！」とメンバーを口説いて廻り、先生に申し出た。先生は、「葬式が終わって後、遺族が故人に成り代わって会葬にお礼を申し上げるというのがあるでしょう。あなたが今ここで、自分の葬式が終わったと思って、お礼のことばをおっしゃって下さい」と言った。

式は抜きにして、お礼のことばだけなんて前代未聞だが、何事も経験と、皆の前に座り直して手をついた。「本日は、私のような者のために、こんなに多くの方々がお集まりくださり…」と言いだしたものの、後の言葉が続かない。涙がボタ、ボタと畳の上に落ちる。嗚咽が止まらない。

この時私は、人生で初めて〝生かされている私〟の実感を頂いた。「私のような者」という言葉を、「真実の私の実体、私の真の姿」を正しく知ってロにしたのは初めてのことであっただろう。「真の私」は、日頃思っていた私とは全く違っていた。弱く頼りなく、一人では何一つ成しえない患者であった。その私に、日頃暖かくお付き合い下さる人たちが何とありがたく感じられたことであったか。「ありがとうございます」という言葉を、真に身に染みてロにしたのは、この時が初めてであった。

それから後、ほんの少しずつであるが、何事もおまかせして生きてゆくことができているように思えている。私が念願の「葬式ごっこ」の主役をさせてもらえたのは、それから八年もあとのことであった。

（なかたに　かよ／カウンセラー）

博覧会時代の終焉

1995.12.18「場」の力 フォーラム

復興と新生

京都精華大学の橋爪紳也先生に誘っていただいて、乃村工芸社「場の力フォーラム」にスピーカーのひとりとして参加させていただきました。

乃村工芸社というのは、ま、簡単にいえば博覧会の企画から商店設計やディスプレイまで手がける、空間デザインの総合商社。そこの研究所が橋爪先生と協同で行うテーマ研究の一環として開かれた社内フォーラムに招かれました。もうひとりのスピーカーは、甲南大学の奥野卓司教授。情報人類学の新鋭としてつとに知られた方で、この両雄に挟まれて当方としてはやや「場違い」の気分の参加となりました。

「戦後50年、一直線に突き進んできた社会にさまざまな変化やゆらぎが見られ、これまでの方向性に疑問が生まれている。震災やオウム事件は、その変化の現れである。また、近代のプレゼンテーションの場ともいえる『博覧会』という場も、今年その存在意義が問われたもののひとつである。『都市博』は結局中止となった。携わってきた私たちにはたいへん残念なことであったが、そのあり方を見直し、新しい時代の要請を考える好機とも考えられるのではないか。＜新生＞の視点を持った＜復興＞を今年のテーマとしたい」（フォーラム資料より）

ぼくにとっては都市博中止なんて、ほとんど隣家の夫婦喧嘩のようなことでしたが、こうしてテーマとして突きつけられると、なるほど博覧会というのは、とくに戦後の時代を読むタームとして興味深いものがありました。

博覧会の使命は終わった

19世紀末のパリ万博でエッフェル塔が建ったように、博覧会とは新しい建築デザインやテクノロジーの展示場としてスタートしました。つづいて、世界的な資本主義化と大衆社会が実現するにつれ、博覧会は、近代の大衆が、資本主義がつくりだす新しい商品世界に直接、祝祭的な雰囲気のなかでふれていく装置に「熟成」していったわけです。

「博覧会という商品の劇場を、近代の大衆がどのように受けとめ、彼らの日常意識をどのように変容させていったのか、が最大の問題」（吉見俊哉）

かつて博覧会は、近代文明の華やかな象徴でした。中学生の頃、大阪万博で体験した、あの恍惚と熱情は、ぼくらの世代には、共通した夢でした。「自分たちの未来は、これほど豊かなものと情報にあふれている」という夢…。

ところが、最近では、2005年の万博に愛知県が名乗りをあげて、「いまごろ万博か」と周囲の冷笑を集めたように、すでに博覧会の時代は終わったといわれます。かつての博覧会を支えた、大衆の情報や消費への欲望は、いまや文字通り「大衆化」し、日常がまさに博覧会的世界を実現しているからです。また、直接体験できないものも、高度なメディアがそれを卑近なものとして日常レベルに運び込むことによって、わざわざ博覧会へ足を運ぶ必要もなくなったわけです。

いまや都市社会全体が、じつは博覧会の様相を呈しているといって誤りではないでしょう。

つぎの時代の「場」

しかし、本来的に人間は「集まる場」が欲しい。それが大型のビジネスになれば、もっとオイシイ。で、このフォーラム、俄然盛り上がったわけですが、残念ながら時間がほとんど足りなくて、各員の持論を披瀝した程度に終わってしまいました。まとめ役の橋爪先生も、さぞお疲れのことだったと思います。

秋田としては、立場上、寺町の歴史性とか宗教施設の聖性とか民俗の伝承とか、いい意味で退行的な視線でものをいうしかなかったわけですが、当世関心高いのか、聴衆のみなさんからは、やけに宗教について質問が多かったようです。一流の空間デザイナーから、「オウムの非デザイン性」とか「昔の出開帳の思想」とか、そういう質問が出ること自体驚いたし、「新しい博覧会は、数値的成果とは別の評価軸が必要」という橋爪先生のコメントにも、つよくひかれるものがありました。

うーん、トレンドを満身に浴びて、深く勉強させていただいた一日でした。

合掌。

（あきた　みつひこ）



写真／右から、橋爪紳也先生、奥野卓司先生とわたくし

「ベトナム青年の笑顔が嬉しい」
アーユス関西のプロジェクトが本格化

秋田師が代表を務めるアーユス関西＝仏教国際協力ネットワークでは、昨年よりベトナムのナムハー郡キンバン県において地元の青年協会が取り組む職業訓練プロジェクトを支援しています。

アメリカとの国交正常化、ＡＳＥＡＮの加盟など、近年その経済発展に世界中から注目を集める国・ベトナム。しかし一方では都市と農村の経済格差を生み、特に農村で生活する若者の失業問題は大きな社会問題となっています。

アーユス関西では、上記のプロジェクトを資金援助、去る９月９日から１週間の日程で、現地の視察を兼ねた３回目のスタディ・ツアーを実施しました。

その後は全国各地でプロジェクトの視察報告と募金活動を行い、同年12月１日には大阪の難波別院で報告会を開催、28名の参加者を集めました（写真）。



この報告会では、とよなか国際交流協会の雨森孝悦さんとベトナム人留学生ドウ・ヴアン・ミンさんが、ベトナムの現状とその未来を語り合いました。

事務局ではボランティアを募集しています。お問合せは06-771-7641 まで

大阪仏教救援センター、「ＢＶおおさか」として再発進！

悪夢の阪神・淡路大震災発生から、はや１年を迎えようとしています。被災地は復興に向けて着実に歩み続けていますが、今回の震災で、多くの人々が改めて非常時に際しての対応を考えさせられたのではないでしょうか。

大阪の仏教７団体によって発足した大阪仏教救援センターは、震災発生直後から被災地でのボランティア活動を行ってきましたが、このたびの経験をきっかけに、恒常的なボランティア機関として新たに発足する運びとなりました。

これに伴い、名称も「ＢＶおおさか」（仏教ボランティアおおさか）と変更、一連の救援活動の事務運営を担ってきたアーユス関西も加わって、設立に向けての準備委員会が発足しました。

また、平成８年１月16日には、大阪・梅田の太融寺を会場に、１周忌追悼市民法要を開筵します。これは超宗派で集まった僧侶と一般市民による合同法要で、記念講演では、大蓮寺の檀徒で国連ボランティア名誉大使の中田武仁氏にお話しいただきます。

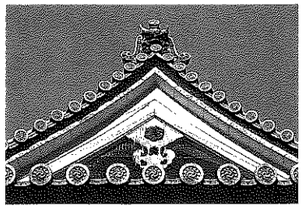
多くの犠牲者の鎮魂と被災地の復興を願う祈りの祭典に、ご参加ください。



阪神・淡路大震災
１周忌追悼市民法要
日時　平成８年１月16日（火）
午後６時半開筵
会場　梅田・太融寺

※聖歌隊・運営スタッフのボランティアを募集しています。
※事務局は大蓮寺内に設置されています。
お問合せは　06-771-7641 まで

'97なにわ人形芝居フェスティバル
“プレ祭”
冥途 IN てらまち



歴史の町並みを今に残す下寺町。江戸時代、近松門左衛門や井原西鶴など浄瑠璃作家の活躍の舞台ともなった下寺町は、現在も近隣に国立文楽劇場、人形で有名な松屋町筋などをひかえ、人形と縁の深い町です。

この下寺町を舞台に、このたび'97なにわ人形芝居フェスティバル「冥途INてらまち」が開催されます。メイン会場には一心寺と大蓮寺が選ばれました。



特に大蓮寺は塔頭・應典院が来年、劇場型寺院として復興されるため、“プレ祭”としての今回の試みが、今後の寺町の活性化を予感させるものとなりそうです。どうぞご期待ください。

と　き：平成８年３月２３日（土）・２４日（日）

ところ：一心寺・一心寺シアター
大蓮寺・應典院建設予定地
その他下寺町寺院



参　加：プロ招待劇団、府下招待劇団、公募劇団の30～40劇団
主　催：なにわ人形芝居フェスティバル運営委員会
後　援：大阪府、大阪市、日本経済新聞社、テレビ大阪他
お問合せは、06-771-7807一心寺シアター「冥途INてらまち」係まで

進化する都市寺院〈應典院〉を解剖する

平成九年、話題の都市寺院〈應典院〉が、いよいよそのベールを脱ぎます。

すでに本設計の最終的段階を経て、来る一月二十一日には起工式、三月五日には地鎮式を控え、應典院は、今まさに再建に向けて、その速度を確実に増しています。

前回は、應典院のソフト面にふれ、そこで繰り広げられるさまざまな取り組みをご紹介しました。今回のウォッチングでは、それらの活動を支えるハード面、すなわち次第に明らかにされつつある應典院の「姿」にスポットを当ててみたいと思います。

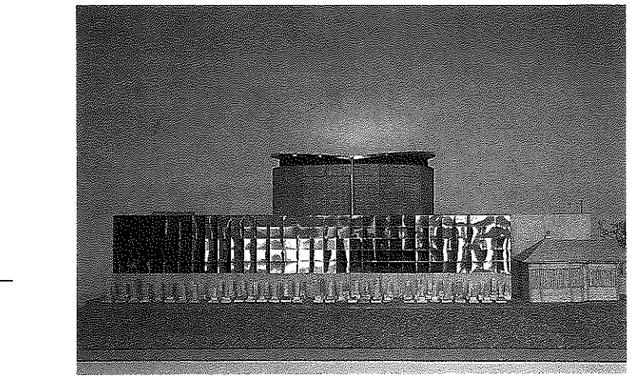
それではひと足早く、進化する都市寺院〈應典院〉に足を踏み入れてみましょう。

● 都市の異界、應典院

應典院は、建坪約百四十坪、コンクリートの打ちっ放しを基調にした鉄骨構造の二階建で、生玉の森の緑を背に、その威容を誇ります。

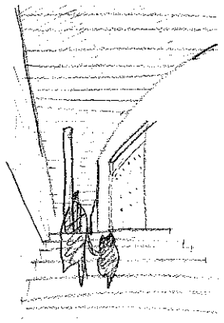
またこの立地は、下寺町の寺院の甍が整然と並ぶ最初の場所。そして西には庶民の胃袋を支える黒門市場、さらには大阪一の繁華街・難波も近く、都会人の生活文化が息づく活気にあふれた界隈でもあります。まさに伝統と現代が溶け合い、新しい都市文化を発信する絶好のロケーションにあるといえるでしょう。

木々の緑に映える陽光と、文化の薫り立つ歴史の町並み。この地に再びそびえる應典院は、まさに都市の異界として、その存在を強烈にアピールします。



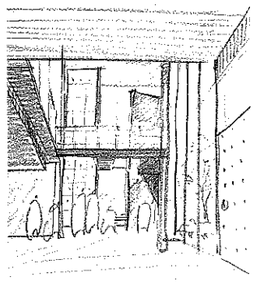
East side

基地と生玉の森をひかえた東側。ミラーガラスが、時の移ろいをダイナミックに映し出す。



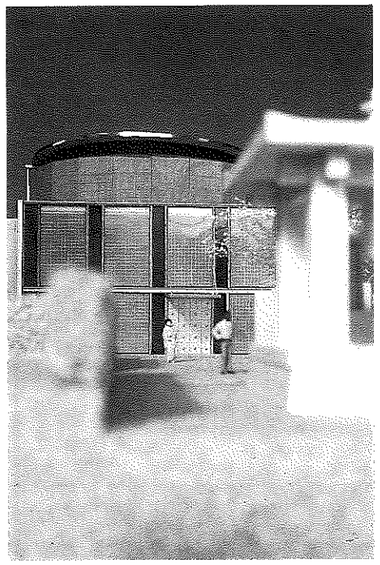
階段

２階ロビーへと通じるゆったりとした階段を上がると、やがてそこに鬱蒼と生い茂る生玉の緑が眼前に現れます。



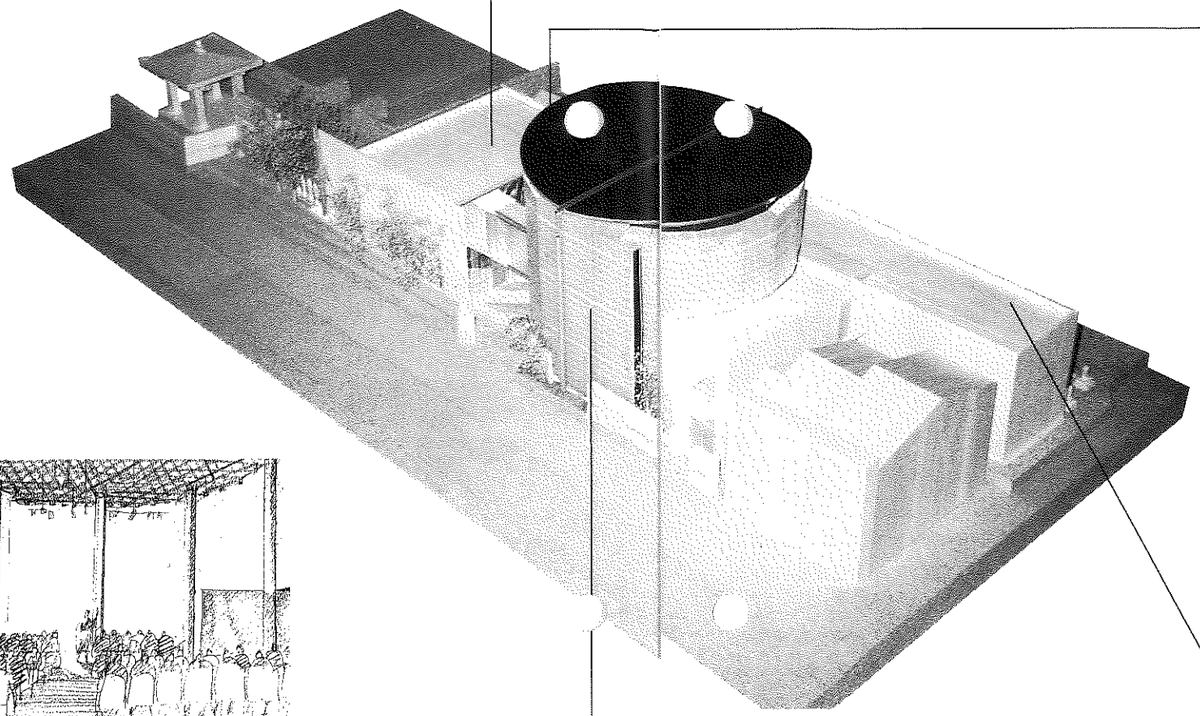
エントランス

まぶしいばかりの光が差し込む開放的なエントランス。扉をくぐると知恵地蔵がやさしく微笑みかけて、あなたをお迎えします。中庭の緑が気分をリラックスさせます。階上には應典院の中枢であるオフィスがあります。



North side

應典院の玄関にあたる北側。右手には六地蔵が並び、訪れる人をやさしく迎える。





ロビー

應典院の憩いの場となる２階ロビー。東側面は全面ガラス窓。生玉の森が一望でき、訪れる人に安らぎを与えます。壁面を利用しての写真や絵画の展示も、人々の目を楽しませることでしょう。

本堂

應典院の「顔」ともいえる本堂は、まさしく闇と光明に包まれた聖なる空間です。整然とそびえる10本の聖柱とそこにあしらわれた金色に輝く宝珠、そしてスリットを通して闇を照らす眩いばかりの光線。

これらの輝きは、訪れる人の頭上に等しく照らされます。

人が集まる、いのち弾ける

最も注目される本堂は、円筒型で、天井高六メートル。音響、照明機能を装備した劇場形式をとっています。堂内では、伝統的な仏教儀礼をはじめ、演劇やコンサートなどの各種イベントから、講演会や美術展示など、多岐にわたって活用されることになります。

また一、二階に設けられた多機能な研修室では、学習会やカウンセリング、カルチャー教室などに幅広くご利用いただけます。

これらの活動のみならず、應典院は都会に住む人々の憩いの場として開放されています。ホール・ロビーから眺める圧倒的な生玉の緑は、きっと訪れる人々に深い安らぎを与えることでしょう。

ひと足早い「應典院ウォッチング」は楽しんでいただけたでしょうか。

應典院に集うさまざまな人々の真剣な眼差し、そして楽しそうな笑い声が、今にも聞こえてきそうな気がしませんか。

●

應典院は進化する都市寺院です。その歩みは時代とともに、そして人々とともにあります。そこに一貫して流れる大慈悲のこころ。應典院は今を生きるすべての人に開かれます。

平成九年五月、あなたと再びお会いできることを心よりお待ち申し上げます。